

ひまわり

透析医療に関する知識 No. 37



寿泉堂クリニック 歴史

寿泉堂クリニック名誉院長
白岩 康夫

寿泉堂クリニック透析センターはその起源を（旧）寿泉堂総合病院人工透析室に求めることができる。日本での透析医療が実用段階に入り、各地で透析医療が実施されるようになった頃、昭和46年4月に透析床3床で当時の眼科外来の場所に新設された。

泌尿器科が診療を担当し、部長は宮田宏洋先生で、この当時郡山市で透析を行っている施設は他に日東病院のみであった。昭和50年にベット数6床と増床し、昭和51年8月には患者数が増加したことにより場所を婦人科外来に移し13床とした。昭和52年9月には夜間透析を開始している。

その後患者数は増加の一途をたどり、昭和59年に更に増床を迫られ19床として旧病院6階の6病棟奥に移転した。その後も徐々に患者数が増え23床、25床と増床し、平成9年4月時点で28床、92名の透析患者となった。





私が寿泉堂総合病院院長として赴任したのが平成7年4月1日であった。湯浅孝子理事長の下で病院の将来計画などを練っていた頃である。

総合病院の移転計画があり、安積町目光池西10番地（今のスプリングガーデンあさかの敷地）に9階建ての病院を新築して全面移転する予定で、設計図までできていた。

それがバブル景気の崩壊に会い、総合病院の新築移転計画が破綻した時期で、次にどのように動くか模索していた。安積町の敷地を何も

しないで放置する訳にはいかない。平成12年4月には介護保険制度がスタートすることになっている。それならその場所に特別養護老人ホームを建設しよう、となり方針が決まった。

総合病院をどうしようかと案を練っている時、銀行筋から駅前1丁目5番地の某証券会社郡山支店が福島支店に統合されるため、郡山支店の建物が売りに出ているとの情報もたらされた。そこで財団法人湯浅報恩会としてこれを買取るべきか否かについて検討した。

その当時健診部門は病院運営上独立しておらず、内科の診察や、乳がん、子宮がん健診などはそれぞれの診察室で外来患者と混同して、ただし健診受診者を優先的に扱うこととして行われていた。このことは一般の患者さんにとっても健診受診者にとっても決して心地良いものではない。また、透析に関しては6階の人工透析室は満杯状態でこれ以上の増床は不可能であった。このような状況を改善するためには7階建ての建物を買い取り、そこに透析部門と検診部門を移転するのが最善であるとの結論に達した。

平成11年、これまでのオフィスビルの改築に取り掛かった。1階から3階までを健診部門、4階、5階を透析室、6階を泌尿器科診察室と透析事務室および透析患者のロッカーと待合室。7階にドックサロンや管理部門を置く、とする現在のクリニックの構想が出来上がった。





ビルの名前をどうするかについては「寿泉堂ビル」とすることでこれは簡単に決まった。整備が終了し、寿泉堂クリニックは健診センター、透析センターの2部門を持つ無床診療所として平成12年5月8日付けで届け出を行い、運用を開始したのが平成12年6月1日であった。開設時の透析ベット数は48床(総合病院より24床移設)患者数は81名くらいだったでしょうか。総合病院には透析専門医教育病院として必要な透析ベット数10床を残した。

発足当初は透析センター長を置かなかった。総合病院の泌尿器科医師が診療を行っていたが、やはり責任者を置く必要があるので平成12年8月1日付けで鈴木孝行先生(現・済生会福島総合病院泌尿器科医長)に福島医科大学泌尿器科から赴任していただいた。

透析センター長は平成15年4月1日から熊川健二郎現クリニック院長にかわり、平成23年11月1日から現在のように百瀬昭志先生となった。寿泉堂クリニック透析センターの前身である寿泉堂総合病院人工透析室では早くから夜間透析を始めている。それは透析療法の個人的、社会的メリットは完全社会復帰が望める夜間透析にこそあるからである。郡山市で夜間透析に取り組んでいる施設は寿泉堂総合病院とともに黎明期から透析療法を開始した日東病院とその関係機関のみであるのも興味深い。寿泉堂クリニックとしては今後も夜間透析を大切にしていきたいと思っている。

☆☆☆イベント開催情報☆☆☆

~~~~2019年忘年懇話会~~~~

**日時:令和元年11月26日(火)17:30~**

**場所:未定**

**会費:1000円**

**内容:熊川先生特別講演、永年表彰式(透析歴20年、30年)、ビンゴゲーム**

**皆さま、奮ってご参加ください!後日スタッフが出欠をお伺いします。**